

財団だより

多摩川

1987. 9 第35号



オンパバッタ
オスがメスの背中によって行動
することが多い



美しい橋の先駆けとなるか青梅郷土博物館前の多摩川に架かる點美橋(人道橋 昭和58年完成)

■ 多摩川風物誌 ■

⑥ 多摩川の橋

多摩川に橋らしい橋が架けられたのは、前にも述べたように、慶長5年(1600)徳川家康の命によって架橋された「六郷大橋」がその初めといいでしょう。しかし、それも貞享5年(1688)の洪水で流されてからは渡船となり、以後近代の黎明を迎えるまで、多摩川には本格的な架橋はみられませんでした。

その理由としては、多摩川が天下に名だたる急流であったこと、架橋には莫大な費用がかかったこと、そのうえ洪水ともなれば流されないのが不思議なくらい技術的にも未熟であったことなど、いくつかの原因を挙げることができますが、徳川幕府が川を軍事上の防禦線と考え、むやみに橋をつくらせない政策をとっていたことも無視することができないでしょう。

それはともかく、対岸交通の手段としての渡しは、古代から人びとがこれに依存してきたもので、多摩川の橋の歴史が近世以後400年に満たないのに対して、比較にならないほどの長い歳月にわたって、人びとの「足」としての役割を果たしてきたことを忘れてはならないと思います。

昭和56年5月現在、羽田の河口から小河内ダムまでの間に、多摩川には75の橋梁を数えることができます。この中には、鉄道の橋梁15、水道管横断橋4、ガス管の抱き合わせ橋1がふくまれています。

このうち、明治時代の生き残りは一つもなく、大正時代のものも、わずかに六郷橋、二子橋(ともに大正14年)、日野橋(大正15年)と東横線多摩川橋梁(大正15年)の4橋に過ぎません。大部分は昭和生まれで、それも戦後の高度経済成長期に入った昭和30年代以降に架けられたものがほとんどです。

高度成長期の車社会をバックに建設されたこれらの橋は、もはや人の歩いて渡る生活の橋のイメージからは大きく変貌して、東名高速や中央高速の多摩川橋梁に象徴されるように、もっぱら自動車のための交通機関となってしまった観があります。そのためか、どの橋ものっぺりとして冷たく、遠方から望むとみな同じように見えて区別がつきません。没個性的な乾いた風景——これが多摩川の橋の特徴といえましょう。

ことばを換えていえば、多摩川の橋は実用一点張りで、近代的なスマートさはあるものの、その橋梁工学にはまったくといっていいほど「美学」がみとめられません。美しい風土と歴史の中ではぐくまれた流域住民の美意識を、少なくとも反映しているとはいえないでしょう。これはひどいことさびしいことです。

かつて橋は、川とかかわりをもつ人びとのシンボルでもありました。シンボルであるためには、橋としての機能性とともなヒューマンな装飾性が要求されます。それゆえに橋も個性的でありえたわけですから。

奥多摩の風光によくマッチした吊り橋も次第にその美しい姿を消しつつあり、青梅市沢井の楓橋から上流に、御岳小橋、柚の小橋、神路橋、梅沢橋、雲仙橋、鳩ノ巣小橋、数馬峽橋、登計橋、シダクラ橋、道所橋と11橋を数えるだけになってしまいました。

もっぱら実用性と機能性のみを主張しているような橋が、やがて人間の心と社会に与えるであろう影響を思うとき、多摩川の橋が一日も早くそうした傾向から脱却することを祈らずにはいられません。

「橋梁による多摩川の地域文化の変貌と環境破壊の調査研究」1981 石井作平
(財)とうきゅう環境浄化財団(一般)研究助成No.14より部分掲載

多摩川散歩

●秋川の古墳

山梨学院大学 十 菱 駿 武

多摩川が平井川と秋川と合流するあたり、草花丘陵と秋留台地のへりには、古代の古墳が良く残っている。

秋川駅の東、五日市線沿いに見える丘が、大塚公園の中にある雨間大塚古墳（都旧跡）である。この塚は1辺33m高8mの方墳となっており、頂上に稲荷の祠がある。多摩地方最大の古墳とされ大真山継の墓という説がある。大真山継は『日本書紀』に、観音信仰によって難をのがれて、多摩郡の次官になったという説話がのっている、奈良時代の小河郷（秋川市小川周辺）の豪族である。だが雨間大塚は葺石・埴輪がみつかっておらず、古墳時代の墓ではなく、中世・近世の塚という推定もある。発掘されたことがなく、謎の古墳だ。

雨間からとうもろこし売りの露店の並ぶ道を北へ行くと、瀬戸岡神明神社のあたりが瀬戸岡古墳群である。瀬戸岡古墳群（都旧跡）は直径5m高1m以内の河原石積の円墳が39ヵ所群集しており、古墳時代後期（7世紀）の古墳である。住宅地にはさまれた栗林にある7号墳で、説明板と石室を見学できる。石室は長さ4m幅1mで少し中央がふくらんだ横穴式石室で、河原石を入念に積みあげている。7号墳は1300年前の墓で、人骨や副葬品はみつかってない。他の古墳からは鉄製の矢、小刀、直刀が出土しており、秋川にいた有力氏族の集団墓地とみられる。瀬戸岡古墳群は積石塚古

墳の形態をしているため、朝鮮からの渡来人の墳墓と考えられる。

平井川ぞいに瀬戸岡から福生方面へ下っていくと、羽ヶ田と草花前に縄文時代の住居跡（都旧跡）があるが、埋没して説明板しか見れない。原小宮と北小宮には直径10m以上の円墳が散在しているが、場所がわかりにくい。多西橋と多摩橋の手前、森山神社の上の台地は、多摩川と平井川の合流点にのぞんで眺望が良い。ここに森山古墳群がある。農家の畑中にある森山2号墳は直径10m高さ1.5mの円墳で、稲荷祠が立つ。墳丘は河原石で全部積まれていて、典型的な積石塚古墳といえる。未調査で内容がわからないが、7世紀代の渡来系氏族の家長クラスの墓だろう。

積石塚古墳というのは、朝鮮半島北部の高句麗を中心に、石で墓室を築き、石を積み上げて円形や方形の塚をつくりあげた4世紀～7世紀の古墳である。日本では香川県石清尾山古墳、大阪府松岳山古墳、長野県大室古墳群などで、積石塚古墳がつけられた。そうした地は古代高句麗や百済からの渡来人が金属・建築・牧馬など先進技術を伝えた移住地でもあった。多摩の農耕牧畜にも渡来系氏族が古くから寄与していた。秋川の場合は8世紀に置かれた小川牧の前身で、秋留台地が馬の放牧に使われていて、渡来人たちは飼育と馬具の製作にあっていたのだろう。住宅地化しつつあるとはいえ、その光景を想像できるのかな秋川の歴史散歩である。散歩の参考には『秋川市文化財地図』、『秋川市史』（秋川市教育委員会頒布）が手頃だ。



瀬戸岡7号墳石室



秋川の古墳案内図

私と多摩川

航空管制官 平田 正治

DAISHI, ROKUGO, TAMAGAWA, GASU, MARUKO.

多摩川に架かる橋の名称である。羽田の管制官が最初に覚えるのがこの橋の位置である。

自家用機など小型航空機のほとんどは、パイロットが目視により地上の障害物や空中の他の航空機との衝突を回避しながら飛行しその責任はパイロット自身が負わなければならない、有視界飛行(VFR)である。パイロットは地表の川や橋、鉄道や駅、道路や特徴のある建物などを目標に自機の位置を知る。たとえば、高速道路第三京浜の入口上空から多摩川に沿って北上すると調布飛行場が、南下すると河口に羽田空港が発見できるといった具合だ。

このVFR機が空港に着陸またはその周辺を飛行しようとする場合、各空港ごとに定められている『目視位置通報点』上空で管制官からの許可または指示を受けなければならない。

冒頭の橋は羽田空港が定めている『目視位置通報点』の一部である。

仕事で疲れたとき多摩堤を通過して帰る。多摩川の広々とした景色は薄暗いレーダ室での息詰まる緊張から私を一気に開放してくれる。

河原で遊ぶ子供たちを見ると私の子供の頃を思い出す。京都・加茂川で遊び育ったあの頃のことである。

『加茂川』は高野川と合流する葵橋から上流をさし、下流を『鴨川』という。葵橋から上流へ上賀茂神社わきの御みそのぼし園橋までの堤道路はさながら緑樹のトンネルである。比叡連峰を背景にこの堤から見る加茂の流れは絶景である。

川は私にとって心の故郷でもある。川で遊んだ思い出は私の心をリフレッシュしてくれる。だから水はきれいであってほしいと願うのだ。

そう云えば、多摩堤には木影が少ない。水も濁っている。

私は二子橋から下流の多摩川しか知らないが、

河川敷は実によく整備されている。広い河川敷でスポーツに興じている人々の光景は健康的ですがすがしい。しかし、水辺に人を見かけることは少ない。時折、釣りをしている人を見かけるが何を釣っているのだろう。

多摩川は小型航空機の飛行コースとなっているが、この濁った流れは上空からは死んでいるようにしか見えないだろう。六郷土手附近で大きな鯉や鮒がたくさん泳いでいるのを見たという友人がいた。私には信じられなかったがある日、多摩川の流れの中で神輿を担いでいる人たちを見た。名前は忘れたが近くの神社の祭りであった。多摩川と生活している人々がいるのである。この祭の由来は知らないが、私には汚れた水を清めているようにも見えた。

管制塔から多摩川がよく見える。最近、乗合船が河口によく集まってくる。ハゼがよく釣れるらしい。この分でいくと多摩川に鮭が帰ってくる日はそう遠くはなさそうである。その日が楽しみである。

目視位置通報点 (◎印)

(Visual Reporting Point)



甦れ！多摩川

●首都圏の渇水と多摩川

山道省三

6月から7月の半ばにかけて大騒ぎをしていた首都圏の渇水問題が、このところ鳴りをひそめている。一時は利根川水系6ダムの貯水量が満水時の13%にまで落ち込み、連日水位が低下し地膚を露呈したダムの様子が新聞やTVニュースで流されていた。その後の台風による降雨や雷雨により貯水量は40%(8月15日現在)回復したものの、都水道局のいう危機的状況は脱していない。

東京都は水需要のうち77%を利根川に依存しているが、利根川の水は昭和30年代の後半から通称利根川フルプランとしてさまざまな水源開発が行われてきた。ところが、この水源開発は計画通り進まず、今日荒川を加え、利根川・荒川フルプラン(第三次フルプラン)として事業が進められているものの、供給計画は大幅に遅れ、ことにダム開発の遅れが甚しい。その理由は水没補償や地域対策に費用と時間がかかるためで、ちなみに矢木沢ダムで工期9年(昭和42年完成)、原水コスト(都市用水)毎秒1m³に7.32億円、下久保ダムで同8年(昭和43年完成)、同6.6億円、草木ダムで同12年(昭和51年完成)、同29.71億円という高騰ぶりである。それにしても、60年達成予定の年間56億トンの水源確保予定は、22億トン分しか達成されていないとすれば、数値上は明らかに水不足の状態にあるといえる。

この渇水騒ぎの時、利根川からの取水制限は最大30%まで行われ、その分、多摩川水系の奥多摩湖の水が回された。現在の取水システムは、利根川系からできるだけ取水を行ない、足りない分を多摩川から取水していく方法がとられている。つまり、奥多摩湖に貯えられた東京の約1ヶ月分の水は、給水制限などの技術的節水と組み合わせながらできるだけ貯えておく最後の備蓄水ということになる。そこには、多摩川が東京都にとって唯

一の自前の水源という以上に、奥多摩湖は一度カラにしたら満水にするのに2~5年もかかるという事情がある。そうした背景をうけて登場するのが、新潟の信濃川分水や群馬の尾瀬分水であり、多摩川水系における第二、第三の備蓄ダムの建設問題であると言えよう。

利根川流域を越えて日本海側からの分水をしなければならぬ程、東京の水不足はひっ迫しているのか？どれだけ水があれば東京の水は満足するのか？際限なく集中化し膨張する首都圏の人口を目のあたりにして誰も答えを出せないのが現状である。ただ一方的な需要予測にあらわれた数値を埋めあわせるべく奔走しているかにも見える。

今回の渇水は有効な降雨があったため、とりあえず小康状態を保っている。

しかし水資源問題はこれを機に一気に動き出す気配がある。ダムを作らなくても利根川の水は充分余っていると一部の学者の意見は、水利用の効率化とともに資源の有効活用の手法を多様で多段階にすることを主張している。これはとりも直さず治水が現在直面していることと同じである。節水や雨水、処理水の再利用といった個別の対応を総合的に見直した上で何がどう足りないのかを明らかに示すべきである。水管理はもともと総合的であり、その容量には限度があるはずである。矢木沢の干あがった湖底を見せられてただちに新たな水源やダムが必要だとする考えには、どうも納得できない何かを感じる。

関東にあるダムの貯水状況
(29日9時現在・建設省調べ)

河川名	ダム名	有効容量 (万m ³)	現貯水量 (万m ³)	貯水率 (%)
利根川	矢木沢ダム	11,550	166	1
	藤原ダム	3,101	701	23
	相模原ダム	2,000	71	4
	蘆原ダム	1,322	40	3
	下久保ダム	12,000	3,648	30
	草木ダム	5,050	1,169	23
	合計	35,023	5,795	16.5
鬼怒川	五十里ダム	1,650	402	24
	川俣ダム	5,250	2,016	38
	川治ダム	4,359	4,008	92
	合計	11,259	6,426	57
多摩川	小河内ダム	18,540	14,138	76

財団からのお知らせ

〈研究助成〉

多摩川環境調査助成集（第8巻）が完成しました。内容は下記の通りです。

助成集（第8巻）

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
●多摩川に生息するヨシマツユスリカの年間世代数の算定	竹 村 彪	川崎市立橘高校教諭
●等々力溪谷(谷沢川)の武蔵野台地露頭中に含まれる化石珪藻の研究Ⅱ 一上総層群と武蔵野砂礫層の珪藻及び東京層と上総層群の珪質原生動物等の研究一	小 出 悟 郎	神奈川県内広域水道企業団水質試験所長
●秋川流域・加住丘陵の土柱の形成と保全研究	清 水 長 正	明治大学大学院生
●多摩川上流・日原川流域の陸水学的研究	角 田 清 美	都立小平南高校教諭
●多摩川における自然環境の調査研究と住民参加による科学的簡易環境測定法の開発	綿 貫 知 彦	神奈川県衛生研究所主任研究員
●狛江市に存在した中小河川、用水、清水の調査 一狛江第三小学校地域を中心として、昔の生活や発展を中学年(小学校)の社会科教材として活用する方法	野 村 義 子	狛江市立第三小学校教諭

● 川の用語

④ 給水制限

水不足が深刻になると河川から原水の取水を制限せざるを得なくなる。東京の場合、まず利根川水系からの取水制限という形で表われ、少量であれば小河内ダムからの緊急放流により多摩川系でまかなえるのだが、事態が深刻な場合は給水制限という形で配水量を押える。

制限率は、ダムの貯水量、取水率、需要予測、降雨予測を総合的に判断し、状況にあわせて制限率が決められる。

制限方法としては、新聞発表により節水の呼び

かけを行うとともに、浄水場からの送水圧低下、配水場からの配水圧低下により水の出を制限する方法と、今回も行われたように公営プールの使用制限、大口利用者に対する利用制限など、その時の社会状況、需要状況により判断される。

給水制限率が徐々に増加していくと、時間給水という一時的な断水が行われることになる。これについても、どの時間帯にするかはその時の需要状況にあわせて行われる。

(文責 山道省三)

シンポジウム開催のお知らせ

流域住民団体や自治体によるシンポジウム開催をご紹介します。

〔I〕

- **テーマ** 二ヶ領用水開削390周年記念 水辺再生全国集会
「都市に本物の水辺再生をもとめて」
- **主催** 二ヶ領用水開削390周年記念 水辺再生全国集会実行委員会
事務局 二ヶ領用水の再生を考える市民の会
事務局長 井田安弘
川崎市多摩区中野島853
☎044-932-1366
- **期 日** 昭和62年 9月26日(土)～27日(日)
- **会 場** * 9月26日(土)
シンポジウム 総合自治会館ホール
懇親会 総合自治会館会議室
* 9月27日(日) 二ヶ領用水見学会・高津市民館
- **参加費** 前売り1,000円, 当日1,200円(2日間共通・資料代含む), 二ヶ領用水見学会500円, 懇親会3,000円
- **プログラム**
* 9月26日(土)
12:00 二ヶ領用水関係ビデオ上映
13:00 基調報告
基調講演 講師 広松 伝
事例報告
17:00 終了

- 18:00 懇親会
- * 9月27日(日)
9:00～12:00 二ヶ領用水現場見学
(JR南部線稲田堤駅前集合)
- 14:00 まとめ(高津市民館)
- 14:30 閉会

〔II〕

- **テーマ** 『クリーン西多摩運動』を考える
「美化とトイレとまちづくり」
- **主催** 西多摩地域広域行政圏協議会
事務局 地域交流センター
港区新橋3-3-4 ☎03-580-8284
- **期 日** 昭和62年11月5日(木)～6日(金)
- **会 場** 青梅市市民会館
- **参加費** 5,000円
- **プログラム**
* 11月5日(木)
10:00 西多摩地域広域行政圏協議会 会長挨拶
10:30～12:00 講演 講師 寄本勝美
13:00～15:30 研究分科会
15:40～17:20 パネルディスカッション
18:00～20:00 交流懇親会
11月6日(金)
* 9:00～11:00 現地見学会

※詳細はお電話で主催者にお問い合わせ下さい。

新刊紹介

「緑のまちづくり学」

進士五十八著 学芸出版 1987年4月

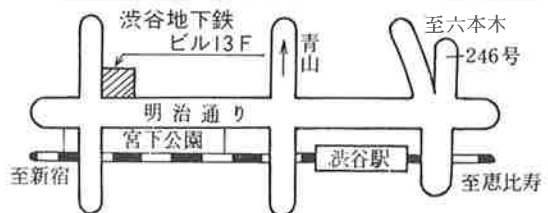
自然と人とのふれあいを地域活動でどう実践していくか、数多くの具体例をもとにハード・ソフト両面から展開した街づくり学の理論、実践書。

「薬学外論」～薬学から市民へのメッセージ～

小山泰正編 薬業時報社 1987年7月

水、食物、廃棄物、薬品などさまざまな生活必需品を薬学の観点から見直したユニークな生活環境論。

- ・発行日 昭和62年9月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (0488)31-8125